

常滑の水指

との合作などが知られています。

二代伊奈長三（1781～1858）は、急須の名工としても知られる人物で、白泥土の発見や火色焼（藻掛焼）を創案するなど常滑の茶道具制作の発展に尽力しました。天保十四年（1843）、尾張藩主徳川齊荘（1810～1845）が知多半島を巡覧した際、二代稲葉高道、初代赤井陶然らとともにロクロを披露し、大いに称賛されました。白泥土の干筋手（筋引き）水指、管耳水指、芋頭水指などロクロによる優品が挙げられます。

明治時代から大正時代に活躍した初代不識庵素三（1866～1922）は、伊勢、山城、四国、備前などの諸窯を歴遊し、各地の学んだロクロの名手でした。茶道具の制作や施釉された作品を手掛けています。

昭和初期に活躍した井上楊南（1869～1956）は、若い頃から図画の才能に恵まれた人物です。日本美術院で岡倉天心や横山大観らの指導を受けました。常滑陶器学校の図案科教員となり、同僚の仕事を見て、絵画からやきものの道へ進んだことから「入陶養楊南」と名乗りました。また「楊南」は、名古屋城の別名の一つである「楊柳城」の南にある知多半島で制作活動をしていたためと考えられます。楊南の作品は自由闊達で、絵付けや彫り、化粧土を使った象嵌等、様々な加飾を得意としました。知多地域では、今も多くの愛好者がいます。

近代以降も独創的で高い技術をもつ作り手が多数います。また、これら先人の研鑽が重ねられて、現在も常滑ならではの土の魅力、洗練された技術のもとで作品が手掛けられています。

（とこなめ陶の森 おぐりやすひろ）



黄釉菱形水指

時代：大正時代 製作者：初代不識庵素三
高さ：13.5cm 口径：17cm, 17.5cm



漆桶水指

時代：大正時代 製作者：二代杉江寿門
高さ：20.5cm 口径：17.5cm

常滑の不識水指

茶の湯に使用される水指は、釜の湯へ水を指して湯加減を調節し、茶が付着した碗を清めるための清浄な水を蓄えておく蓋つきの容器です。

近世（安土・桃山時代から江戸時代）につくられた常滑焼の水指は、口径が15cm程度、ソロバン玉のような形をした小型の壺です。考古学や古美術の世界では、広口壺と呼ばれているやきもので、13世紀中頃に生産が始まります。つまり、この広口壺は、茶道具としてつくられるようになったわけではなく、当時の茶人らが壺の形や大きさを見立て、水指として珍重するようになったと考えられます。その背景には、茶の湯の成立と深い関係にある禅宗を考える必要があります。

わび茶の完成者として知られる千利休（1522～1591）の高弟の一人、山上宗二（1544～1590）が記したとされる『山上宗二記』の一文には、「茶の湯は禅宗より出たるに依りて、僧の行を専にする也。珠光・紹鷗、皆禅宗也」とあります。また、千利休も同じく京都大徳寺の古溪宗陳（1532～1597）のもとへ参禅して修行をしていました。このことから、山上宗二は、わび茶の創始者である村田珠光（1423?～1502）、村田珠光の継嗣となった村田宗珠（生没年不詳）に師事した武野紹鷗（1502～1555）らを、禅宗の系譜から読み解くことで茶の湯の正当性を強調したと考えられます。



印花文広口壺

時代：室町時代 製作者：作者不明
高さ：17.7cm 口径：17.1cm



十字文広口壺

時代：室町時代 製作者：作者不明
高さ：15.8cm 口径：13.8cm

千利休は、茶味（茶の湯の風雅な趣き）と禅味（俗世を離れた枯淡な趣き）が一体であるという意味の「茶禅一味」について、「小座敷の茶の湯は第一仏法をもって修行得道することなり。水を運び薪を取り、湯を沸かし茶を点てて、仏に供へ人にも施し我も飲み、花を立て香を焚きて、みなみな仏祖の行ひの跡を学ぶなり」と解説しています。つまり、作為性のない、素朴で剛健な常滑の広口壺が、禅と茶の湯の精神と合致し、茶道具として取り入れられていったのではないかと考えられます。

今日まで伝来した江戸時代以前の広口壺の一つに千利休が見出したとされる常滑焼の水指があります。当時の茶会記である「利休百会記」には、利休の晩年である天正十八年（1590）から翌年にかけて開かれた茶会の道具の取り合わせが記載されています。そこには、雲龍の釜に「はけ

もの」の名前で常滑焼の水指が取り合わされています。「はけもの＝化物」の水指の箱書きには、利休から小庵、元伯、江岑、宗全と千家から久田家へと伝来し、江戸中期（18世紀）には尾州知多郡大野の浜島伝右衛門のもとにあったことが記載されています。また、「ふしき＝不識」（知らないこと）は、禅語で「はけもの」と同じ意味であることも説明されています。これは偶然のことかもしれませんが、同じく大野の齊年寺には、国宝に指定されている雪舟筆「慧可断碑図」があります（現在は京都国立博物館に寄託）。このことから、常滑焼の水指、銘「不識」は、千家や久田家、尾州（知多半島を含む）の茶人にとって、利休の伝来を物語るとともに、利休が理想とする茶禅一味を説明できる確かな茶道具として評価されました。その証拠に、江戸時代後期（19世紀）以降、常滑を訪れた茶人や常滑の名工によって、多くの不識水指がつくられるようになりました。

名工たちの水指

常滑の名工による水指がつくられるようになったのは、江戸時代中期の18世紀後半からです。この時代は、茶人による手づくりの茶道具制作も盛んになり、常滑の陶工も茶道具への関心が高まっていました。そのきっかけをつくったのが常滑元功齋（1721～1804）と青洲和尚（1734～1807）です。常滑元功齋は、尾張藩主より命を受けて茶道具などを納めた人物で、名前を下賜された常滑初の在銘陶工です。常滑元功齋の作品には、上から見ると三角形にゆがませた水指や耳付きの水指などの雅味な作品があります。

青洲和尚は奥条にある萬年山相心寺の第八世住職です。名古屋で作陶の技術を学び、常滑で楽焼をはじめました。また、茶の湯にも造詣が深く、茶道具の制作を指導したことも伝わっています。つまり、常滑の名工時代のパイオニア的存在ともいえます。

上村白鷗（1754～1832）は和歌や連歌を得意とした風流人で、不識水指の名手であったことから、常滑の「陶芸の陶祖」の碑も建てられている人物です。京都の楽吉左衛門家や尾張の茶人



真焼耳付水指

時代：江戸時代 製作者：常滑元功齋
高さ：17.2cm 口径：13.1cm



千筋手藻掛水指

時代：江戸時代 製作者：二代伊奈長三
高さ：18.4cm 口径：12.3cm